

動いてヒトになり、群れて人間になる

このような結果は、おとなの認識とは異なる子どもからみた学校の存在意義を教えてくれているように思います。

また、子どもの困りごとの第1位に「(思うように)外に出られないこと」、第2位に「友だちに会えないこと」がランクしているという事実は、「子ども時代」の保障を考える際の大事な示唆を提供してくれているようにも思うのです。動いてヒトになり、群れて人間になる、というのは、私達人類は動物です。動物は、“動く物”と書くように、広義の意味で動かなければヒトにも、人間にもなれません。

その点、人類の歴史の99%は狩猟採集生活であるとともに、ヒトの遺伝情報は狩猟採集生活に適したままであるともいわれています。

実際、現代社会で狩猟採集生活を続けているハッザ族を対象にした研究では、1日の移動距離が女性で9 km、男性で15kmと報告されています。そのため、生活習慣病は極めて稀ともいえます。対して、いまの日本でそのような日常生活を送っている者は少数です。また、そのような生活は自らの遺伝情報とミスマッチです。これでは、生活習慣病が蔓延するのも当然といえるでしょう。

また、人類は人間でもあります。人間は、“人の間”と書くように一人で進化してきたわけではありません。仲間や家族とともに協力しながら進化してきました。

この点についても、ゴリラ研究の第一人者である山極嘉一氏は、進化の過程で子どもをたくさん抱えることになって母親だけの子育てが困難になり、家族と複数の家族を含む共同体という社会が生まれたとの仮説を示しています。要は、子育てのために社会が生まれた、子育てのために群れる仕組みができたとの仮説です。このように考えると、私たち人類は生きるために動き、子育てのために協力しながら進化してきたといえないでしょうか。もっと言うと、「動いてヒトになり、群れて人間になる」のです。

「(思うように)外に出られないこと」「友だちに会えないこと」に困っていたという子どもたちの声は、私たち人類がヒト(動物)であること、人間であることを敏感かつ本能的に感じて。私たちに教えてくれているようにも思うのです。

と同時に“動くこと”や“群れることを保障してほしいとの声と捉えることができるのです。

子どもは「遊び」でできている。昨年(2024年)は、第一次世界大戦で多くの子供達の命が奪われた反省から国際連盟(当時)が「子どもの権利宣言(いわゆるジュネーブ宣言)」を採択して100年(1924年9月26日)、ポーランドの提案により国際連合がそれを条約に発展させた子供の権利条約jが採択されて35年(1989年11月20日)、さらにその条約を日本が批准して30年(1994年5月22日)の節目の年でした。

それだけでなく、国連総会が毎年6月11日を「国際遊びの日(International Day of Play)」に制定したのも昨年3月25日のことでした。

そもそも、「遊び」には、“動くこと”や“群れること”が必然的に内包されています。いつの時代のどの地域の子どもたちも「遊び」が大好きなのはそのためなのかもしれません。

また、「遊び」は子ども時代そのものです。子ども時代の象徴ともいえます。まさしく、「遊びは学び」であり、「子どもは遊びでできている」とさえ思うのです。

ところが、「遊んでばかりいないの!と怒られている子どもを目にすることはあっても、不思議なくらい「学んでばかりいないの!と怒られている子どもを目にすることはありません。ダブルスタンダードといえないでしょうか。これでは、子どもたちが困惑するのも当然です。プレッシャーを感じるのも当然です。もっとも子どもたちは「学び」のために遊んでいるわけでも、「育ち」のために遊んでいるわけでもありません。

遊びたいから遊んでいるのです。まさしく本能です。子どもの子どもによる子どものための「遊び」とはそういうものであり、それこそが「子ども時代」であると思うのです。(次回に続く)